

中世寺院と「たたら製鉄」の利権構造

―誕生寺「鐘しようちゆう鑄日鑑」(元禄一五年『誕生寺古記録集成』所収)を手掛かりに―

瀬川久志

はじめに

漆間時国(一〇九八年頃―一一四二)は、法然上人の幼少名・勢至丸の父で、美作国久米南条稲岡荘に住む押領使であった。筆者の法然上人の研究には、たびたび登場した人物で、『法然上人絵伝』によれば、源光の後胤式部太郎源年と久米の押領使神戸大夫漆元国の女の子盛行六代の子孫に当たるといわれるが、諸説多いとされる。一一三三年、夫人秦氏との間に勢至丸が生まれた。勢至丸の出生に関してはいくつかの神秘的な伝承があるが、ここでは割愛する。一一四一(保延七)年、次に紹介する稲岡荘の領あずかりしころ所明石定明の夜襲をうけ、そのときに負った傷がもとで落命したとされるが、この夜襲のいきさつは、ちよつとしたいさかいごとが原因だったとされるも、真相は定かではない。この間の事情については、拙著『法然上人 生誕の地美作国に関する研究 Kindle版』を参照されたい。時国の臨終に際し、勢至丸に復讐が無益であることをさとし、出家するように遺言したと言われ、勢至丸は母秦氏の弟で菩提寺の観覺上人のもとへ上り、学問の道を志し、後に京を目指す。そして苦行の末、浄土宗を開祖した。

明石源内武者定明の生没は不明（一二世紀中頃）であるが、美作国久米南条稻岡荘の庄官（預所）で、法然上人の父を殺害し、上人の出家の動機を作った人物として知られることはすでに述べた。同じく国宝『法然上人絵伝』によれば、伯耆守、源長明の長男で、漆間時国を夜襲した際、勢至丸の射た矢が眉間にあたり失踪したとされるが、これもそう言い伝えられているだけで真相は定かではない。

ところで、誕生寺の寺伝に「片目の魚伝説」があり、まず久米南町によれば「弓の腕をめきめきと上達させていた勢至丸（法然上人）に、夜襲の際右眼を射られた（絵伝では両目の間つまり眉間となっている）明石定明が、小川でその目を洗ったため、以後片目の魚が出現するようになったと言われ、川そのものも片目川と呼ばれるようになりました」という。（久米南町ホームページ）この「右目」の言い伝えは、なぜかは分からないが、観光案内にも使われている。

末広恭雄の『魚と伝説』（新潮文庫、昭和五二年）には、誕生寺の漆間住職からの手紙の紹介として、定明の左目を貫いたとされ、左目を洗ったら、一夜のうちに魚も左目を失ったとされている。『絵伝』の話の眉間が右目に変わり、さらに誕生寺伝では「左目」を失い、飛躍をして魚の左目がなくなるとされ、混乱が見られるのである。この言い伝えを解釈した人たちが、都合のいいように安直に理解し、その場限りの解釈で書き留めたり、言い伝えたりしたのである。真偽のほどは分からないのであるが、このことを考えることは、実は大きな意味があるのではないか、私はそう考えて、文献や資料を読み、現地を訪れて考えてきた。その結果が本論である。

誕生寺の本堂には、この片目の魚のアルコール漬け（後掲写真）が展示されている。片方の目がないというのではなく、白く濁っているという形状である。本稿は、「たたら」という古代からの製鉄法に関連させて、この歴史の謎の一端の解明に迫ろうというものである。なお、アルコール漬けの鯉は、右目ではなく左目である。

「片目」に表現される物神崇拜

「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説¹⁾」によれば、片目の魚は「日本古来の伝説の一つ」とされ以下の様な解説を与えている。

「池に住む魚の目が片方だけというもの。その池は寺社の境内にあるという場合が多い。片目の由来はいろいろあるが、神聖なる魚として尊重する心意の点で共通している。片目の魚については、片目のものを神が好まれたという考え方から、神供の魚と他の魚を区別するために、目を片方つぶして寺社の池に放しておいたとする考え方と、自然的に発生した特殊な魚の神秘性から、その場所が霊場視され、寺社の信仰が導かれたとする考え方がある。いずれにせよこの伝説は片目の神を祀る信仰に基づく伝承といえる」

いわゆる「パワースポット」を興味半分で訪れる、今の風潮と似通ったものがあるように思える。誕生寺に伝わる伝説は、「片目の破壊」でもなく「自然発生」でもない、実在した「地方武士の傷の血による片目魚の発生」という別のタイプの伝説ということになるが、以下に、なぜそのような言い伝えが形成されたのか、考察してみようと思う。単なる作り話なら、自然消滅してもよいはずだ。

まず「もののけ姫」から始めよう。「もののけ姫」の関連テーマを考えるサイトに²⁾「赤不浄」に関する記述があり、「鑄物師^{いものじ}」は、女性の出産・生理による出血を忌み嫌ったという。金屋子神^{かなやこがみ}は「たたら師・鍛冶屋など金属関係の業者が信仰する神である。この神が中国山地に降臨して、たたら製鉄が始まったと伝えられる。金屋子神は、誕生寺の北に位置する鏡野町の鍛冶屋谷たたら遺跡にも現存し、祭られていた。写真は、二〇一九年夏、筆者が同遺跡を訪問し撮影し



たものだ。誕生寺に伝わる片目の魚伝説には「赤不浄」の嫌悪感が見え隠れする。

もののけ姫は、「たたら製鉄」をモチーフにした有名なアニメーション映画であるが、「たたら」と環境の本質は、映画が描くような「たたら」をめぐる武士の利権と地域共同体の利権の対立というよりも、鉄穴流してつあなながしによる流域の河川水の汚染と残滓の農耕への影響ではないのか。地域の住民の中にも、たたらの「汁」が原因ではとの理解を示す人がいる一方で、関連はないとする人もいる（鉄工所経営）。

たたらの開発が農耕地開発につながったり、海辺の砂浜の涵養に結びついたり、たたらと農耕の「共生」を強調することに一理はあるが、農耕もある意味で自然界からの収奪だとすれば、広葉樹林の大量伐採は流域の水資源の劣化であり、「たたら」は二重の意味で農耕社会と対立関係にあったということもできる。二重のもう一方は農耕労働力の「搾取」である。中世寺院もこのたたら製鉄に一定の利権を有していたことを考えると、「片目の魚」伝説に、具体性を帯びた解釈を与えることが可能であるように思われる。

全国の八割の粗鉄を供給したとされる中世出雲の鉄山に関しては、いくつかの資料³によって知ることができるが、今後の課題としたい。この紹介では、たたら経営が、環境、地域産業（農耕）、地域文化に関して、持続可能であったことが強調されているが、「たたら」がもつ利権の構造に関しては言及されていない。本論文では、「絵伝・誕生寺伝片目の魚伝説」を、たたらの利権（生産）構造と関連せしめて述べるものである。

たたら経営の多層構造



森藩のたたら経営について知るすべは、鏡野町の旧富村に復元された「たたら」遺跡・資料館にあるが、その経営の実態に関しては資料が見当たらない。また、東寺とたたら荘園経営については、同じく岡山県新見のたたら遺跡（大成山たたら遺跡 〒719-3612 岡山県新見市神郷油野）によって知ることができる⁴。法然上人絵伝と誕生寺に伝承される「片目の魚」伝説の謎を解くには、当時のたたら経営と誕生寺周辺の「たたら」をつぶさに検討することが必要である。

まず手始めに、津山市の中山神社と製鉄との関係を考えてみたい。中山神社は美作の国の有力神社の一つであるが、志野敏夫は、平安から鎌倉にかけて中山神社が製鉄に係っていたとしている⁵。

勢至丸の父親の時国は、高野神社に関連する地侍（押領使）であり、中山神社の製鉄とのつながりはなかったのである。むしろ、中山神社の製鉄利権が、次に述べる肩野物部製鉄集団に握られていたとすれば、漆間時国の製鉄利権は肩野集団と対立していたと考えるべきであろう。次にこの肩野集団の説明をしよう。漆間時国が、製鉄に利権を持っていたというのは、証拠があるわけではなく、ここではただ時国が居所としていた「本丸城」が、今回の調査で明らかとなった「たたら遺跡」と至近距離にあるという理由だけからだ。写真が本丸跡であり、向こうには誕生寺がある。

肩野物部氏と鉄・鉄器生産の利権に関して、交野市教育委員会の資料⁶は次のように述べている。いまこの資料によって製鉄集団の地理的配置を説明しよう。

「誕生寺川流域は、岡山県中央部を流れる旭川水系に属しており、福渡で岡山県三大河川の一つ旭川に合流する。支流として、小原川、片目川、紅梅川、名越谷川、日南川、大家川、塩之内川、宮地奥川、泉川、石風呂川、全間川、奥田川、中田川、宮地川、大谷川、里見川、金屎川、豊楽寺川、野伏尾川、片島川をかかえ、この中で、金屎川は精錬残滓の放流に使われた川であると考えられることができる。金屎（糞）はスラグ（鉱石を精錬する時に出る滓で鉱滓）とも言い、ドロス（溶けた金属の浮きかすや不純物）のことである。青森県八戸市や愛知県一宮市にも同名の地名がある。金屎岳という山もあるが、元は金糞岳だったという。

<https://enki eden.exblog.jp/27191747/>（二〇一九年十二月 アクセス）

金屎という地名は、岡山県美作市金原の旧称で、美作町成立時に改称されたものであるという。原に変わったのは、水質汚濁や森林破壊という悪しきイメージを嫌ったからではなかっただろうか。金屎川⁷は建部町下神目^{こづめ}で誕生寺川に合流する小河川であり、水源は池になっており、小河川は、直線で南から北へ流れ、水路のように誕生寺川へ注いでいる。この池は、たたら場であった可能性がある。しかし、この金屎川という名称は、地図上では用いられていない。河川の名称としては、隠ぺいされたのであろうか。

前掲「肩野物部氏と鉄・鉄器生産 岡山と交野の結びつき」に戻ろう。平成七～九年に誕生寺川流域での製鉄遺跡の分布調査を行った結果、新たに五地点で製鉄遺跡が確認され、一四・久米南町北庄地区秋宗（砂鉄系製錬滓・平安時代）、一五・久米南町松地区荒神池（砂鉄系製錬滓・平安時代）、一六・久米南町上二ヶ地区金屎池（砂鉄系製錬滓・平安時代）、一七・下邳地区金山池（砂鉄系製錬滓・平安時代後「二〇六三年」が存在したことが判明したとされている）。

たたら残滓・片目の魚仮説

この遺跡群の平安から平安後期は、法然上人の時代とオーバラップしており、『法然上人絵伝』の作者が、漆間時国を夜襲し殺害した明石源内定明が、勢至丸の放った矢によって目（絵伝では眉間となっているが、ここでは「目」としておく）を討たれ、のちに片目川と称されるようになった誕生寺川で目を洗ったと記述されていることと関係している。ここで、法然上人絵伝の作者が、「眉間」として書き記したのと、誕生寺伝説が「左目」とした時期と、どちらが先かという素朴な疑問が生じるが、ここではこの問いは置いておく。誕生寺に伝承される話で、爾来、片目の魚が出現するようになった事実と、たたら場との関係を証明できるたたら跡が発見されたことになる。曰く、

「新たに見つかった遺跡は、立地や採取した資料の形状からみて、平安時代から鎌倉時代にかけての製鉄遺跡である。これ以外の誕生寺川流域の製鉄炉は津山市の各遺跡よりも大型化している。津山市周辺の遺跡との違いは、誕生寺川流域では、製鉄原料には鉄鉱石でなく、すべて砂鉄に切り替わっていることや、滓の組織も銑鉄が生成された時の組織を持つものが多く、原料の変化と炉内温度の高温化がなされ、このことも中世期の製鉄であることを裏付けるものである。津山市あたりではあまり認められなかった鍛冶屋や鋳物師に関する地名もこの誕生寺川流域には多く存在していることも特徴である」とされている。しかし、城下町津山には吹屋町というたたらに関する地名があり、のちに紹介する『誕生寺古記録集成』にも、津山の吹屋町の鋳物師や職人、ふいごの調達に関する記述が残されているのである。ただ、吹屋町の製鉄職人は、久米南町の東に位置する瓜生原や金谷村から移住させられたとなっている。

同史料によると、肩野物部氏は、最初美作の国・国府の北に位置する中山神社に住んでいたが、のち弓削に引越し、そこで、誕生寺とも関係を持ったとされている。この製鉄集団・肩野物部と誕生寺との関係は深いと考えられる。

法然上人に関する誕生寺の伝承で「片目の魚が出た」とされる逸話は、誕生寺川上流域で、たたら原料になる花崗岩質の風化砂鉄の鉄穴流しが行われた環境変化（河川汚濁）が原因、ないしは背景にもつものだとすれば、この伝承は架空の話ではなかったことになる。しかし、片目の魚とたたら残滓との因果関係を強調することは、片目の魚の数多い事例のすべてについて、上流域のたたらとの因果関係を立証しなければならず、「たたら残滓・片目の魚仮説」には無理がある。地元教育委員会関係者も「残滓は流水によって薄められるので原因とは関係ないのではないか」という。この仮説を留保して、別の因果関係の候補を見つけないければならない。

ところで、ダムを旅する人のブログ⁸によれば、

誕生寺川の支流に、釜ヶ谷池という砂防ダムが昭和の初期（四年）に建設された旨記されている。場所は、久米郡久米南町塩之内だが、塩之内は誕生寺のかなり南に位置し、むしろ、製鉄集団・肩野物部の拠点の弓削に近い。場所は、Google マップで確認できる。この釜ヶ谷は、たたらに特定されてはいないが、鏡野町富に同名のたたら跡があり、塩之内もたたらの可能性は高い。交野市教育委員会資料に見える平安時代のたたら地名も、誕生寺から至近距離にあり、誕生寺伝説の「赤い川」「片目の魚」と因果関係を持つ「たたら」の候補は四か所となる。

誕生寺川は本川の源流部に誕生寺池があり、この池を源流としているが、「岡山県大百科事典」には、「天和年間、上弓削村の大庄屋河原善右衛門が作った⁹」とある。天和年間とは、一六八一年から一六八四年までの期間で、法然上人の没後かなり経過して築造されたものである。

窒素ガス説

窒素ガスが溶け込んだ低酸素の河川や池では、目のない魚が見つかることがあり、通常の真水に戻すと目は元に戻るという。窒素ガスは、牛などの家畜の糞が堆肥化する過程で発生するガスで、この糞が何らかの理由で大量に河川に流れ出たとすれば、窒素ガス（一酸化二窒素）が充満した河川で、片目の魚が出現することは容易にあり得る。一酸化二窒素は、強力な温室効果ガスで、今日、地球温暖化防止対策として重要視されているガスである。たたら製鉄には、運搬用に牛や馬が使われた。窒素酸化物は高温による燃焼で発生し、オキシダントに変換し光化学スモッグになり、目がちかちかするなどの公害病を生じさせる物質でもある。

眼のない魚がガス病であり、それが、窒素ガスが過飽和になった環境の中で生じることについては、広島大学水畜産学部水産学科、江草修三の『溶存窒素過剰に因るガス病について』（一九五九年）¹⁰において実験結果とともに述べられているので参考にされたい。

科学知識のない中世の人たちが、漆間時国を討った定明が、勢至丸少年が放った矢に当たり、目（眉間）を負傷して川で洗ったところ、片目の魚が出たとしたことは、容易に考えられる。ただし、両者に因果関係はなく、誕生寺川は、しばしばたたら残滓の放流によって赤く混濁していたという解釈が成り立つのかもしれない。このことが誕生寺伝説の背景要因となったのかもしれない。

隻眼、独眼伝説

ここで「片目の魚伝説」に関連して、隻眼、独眼について触れておく¹¹。すなわち、「学術的な観点からいくつかの説が唱えられている。日本だけに限れば、柳田國男は、『二つ目小僧その他』で、もともと神に捧げるべき生け贄の人間

が逃亡しないように片目（と片脚）を傷つけていたのが神格と同一視されるようになったのが原因であると考えた。谷川健一は、隻眼の伝承がある地域と古代の鍛冶場の分布が重なることに着目した。たたら場で働く人々は片目で炎を見続けるため、老年になると片方が見えなくなる。またふいごを片方の脚だけで踏み続けるから片脚が萎える。（このことは「もののけ姫」のシーンに登場する一筆者）古代は人間でも神々と同一視されていたため、鍛冶の神（天目一箇神^{あまめひとのかみ}など）がこのような姿をしているということになった。そしてこれらの神々は零落して妖怪になった（谷川健一『青銅の神の足跡』）。赤松啓介の見解もこれに近い」としている。（傍点は引用者）また、出典は示されていないが、隻眼の魚の事例として、「武蔵野島の浄山寺門外の池に棲む片目の魚は、延命地藏が茶畑で傷ついた眼をそこで洗ったからであるという。（傍点は引用者）阿波福村の池に棲む片目のフナ、コイその他は月輪兵部が、池の主の大蛇の左眼を射たためであるという」としている。『法然上人絵伝』と「誕生寺伝説」のロジックと酷似しており興味深い。

誕生寺のたたら経営の可能性

片目魚に関する「自然科学的な分析」として、上述の「空素ガス説」のもとになる末広恭雄^{やすお}の「片目魚」（『魚と伝説』新潮社、一九六四年）をあげることができる。この説からの派生として、坂本和俊の『一つ目小僧の原像―製鉄関係神の神格化の構造と考古学研究の視点―』（一九九四年）があり、ここでは「柳田説には疑わしい部分があるとし、一つ目小僧の起源が天目一箇神という説は認めるものの、職業病によって片目片足となった者が神格化された事については賛成できない」としている。柳田罔男の『日本の伝説』は、インターネットの「青空文庫」で読むことができる。

時代は下って、『誕生寺古記録集成』に、元禄一五年の「鐘鑄日鑑」が収録されており、一七〇二年に誕生寺境内で「た

たら」(製鉄)が行われ、大勢の鋳物師らとともに梵鐘が製作された記録が克明に記されている。では、この時代に、寺院は製鉄の利権とどのようにかかわっていたのだろうか。そのためには、誕生寺の近隣にたたら鉱山の遺跡を見つけていなければならない。上に引用した「遺跡」は資料の上でしかない。

その手掛かりを得るために、二〇一九年一月一八日午後、津山線の誕生寺駅を下車し、誕生寺川を遡り、一七世紀に造られたという誕生寺池を踏査した。池の東側にデイサービスがあり、その先で、女性が池を眺めているので声をかける。

「この池はたたらとは関係はありません」

と、池がたたらの跡ではないかと質問した私は、出鼻をくじかれた格好になった。

「法然上人の片目の魚の話なら」

と、八〇才くらいの女性は、「久米南町誌」に書いてあると断った上で、

「寺院の上流に鉱山があつて、汁が染み出て片目の魚が出た」と教えてくれた。古いことに興味があり、調べたという。

「私はここによそから嫁いできたので、来てからのことだけど、片目の鮒は見たことがある。目がないのではなくて白く濁っていた」と言う。

「だから侍が矢で打ち抜かれた目を洗ったから片目の魚が出たというのは嘘」

と、あつけらかんとして言う。地元では、明石定明が目を撃ち抜かれたことになっている。「場所は？」と聞くと、誕生寺の裏の方で愛宕神社の左の方だと言う。(写真の右中央部分)





この池も最近片目の魚が出ると言う。

「池の上流の宅地化で排水が流れるためだ」

と言う。貴重な証言を得た。上に紹介した「平成七～九年に誕生寺川流域の製鉄遺跡の分布調査を行った結果、新たに確認された一四・久米南町北庄地区秋宗（砂鉄系製錬滓・平安時代）がこれに当たると思われる。

あとがき

二〇二〇年一月、再び久米南町を訪れ、教育委員会から紹介された中里地区の中島英雄さんに、誕生寺の上手にある「たたら遺跡群」を案内してもらい、出土品に関しても紹介してもらった。出土品の分析は後に譲るとして、誕生寺の至近距離に、漆間時国の居所（本丸城）跡を確認し、農耕に根差した製鉄地域産業（免田）があったことを確認した。たたら「神」の祠（写真）も確認できた。出土品には「木棺」らしきものがあり、美作国・国府への鉄の納税があったことも分かった。また、「久米南町誌」には、当時、定期的な市が立っており、農耕生産力は徐々に発展していたことも、文献資料から分かった。誕生寺の鐘鑄はこのような生産力の発展段階で、たたらによって作られたのであった。

『誕生寺古記録集成』には、近隣からの原料としての「鏡」や金品の寄進、鋳物師や作業員の派遣があったことなどが記されている。そして、たたら製造設備は、津山藩の吹屋町からの導入によってなされた。作業は九月から二月までの農閑期であった。当時、誕生寺は、津山藩より微々たるものではあるが（石高）荘園が与えられていた。この荘園は、おそらく案内された中里一帯の農地が含まれていたのだろう。その実際の経営は、過去、漆間時国によって行われ



ていたのかもしれない。この地域支配構造が、新参者の定明の癪に障ったのではないだろうか。そして、「片目魚」の伝説は、この歴史の一コマを後世の人たちに伝えるべく作られ、語り継がれてきたのだろう。法然上人の教えを「片目の魚」に託したのだろうと、筆者は思う。

注

1 同辞典での説明は「日本大百科全書(ニッポニカ)の解説」とともに「コトバンク」で紹介されている。

2 <http://www.asahi-net.or.jp/~hn7y-mur/mononoke/monoin/k04.htm#book3>

3 「松江藩における近世中・後期たたら製鉄業の展開」がありその状況を知ることができる。「出雲國 たたら風土記〜鉄づくり千年が生んだ物語〜」

https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/app/upload/heritage_data_file/034-5525943872054564.pdf (二〇一九年十二月 アクセス)

4 「里山とたたら製鉄―京都大学こころの未来研究センター 中世村落の総合的復原研究―備中国新見荘の歴史と水利」

http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokoronomirai/kokoro_voll4_p19_p22.pdf

<http://www.f.waseda.jp/ebisawa/ebisawa/info01-houkoku.pdf> (二〇一九年十二月 アクセス)

5 「美作中山神社とオオナムチ・物部氏―中山神社社伝を中心として―」(岡山理科大学総合情報学部社会情報学科『岡山理科大学紀要』第四一号B、二〇〇五年)

6 「平成二三年度交野古文化同好会・総会資料二〇一一年四月九日 肩野物部氏と鉄・鉄器生産 岡山と交野の結びつき」(交野市教育委員会 真鍋成史)

<http://murata35.chicappa.jp/rekisuiso-ku/11-1/mana149.pdf> (二〇一九年二月 アクセス)

- 7 <https://map.goo.ne.jp/map-simple/latlon/E133.53.18.915N34.52.44.550/zoom/9/> (二〇二〇年一月 アクセス)
 - 8 <http://shuukeian.blog.fc2.com/blog-entry-342.html> (二〇一九年十二月 アクセス)
 - 9 「角川日本地名大辞典」より誕生寺池、『天和年間、美作国久米南条郡上弓削村の大庄屋河原善右衛門によって築造』。また誕生寺池の旧名称は、坪井池とわかる。「久米郡誌」p.16、坪井池成立は『天和年間』。「久米南町誌」には記述無しとされている。
https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndicrdenry/index.php?page=ref_view&id=1000020914 (二〇一九年十二月 アクセス)
 - 10 広島大学リポジトリ、学内刊刊物広島大学水畜産学部紀要二巻二号
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/39691/20160413102447417834/JFacFishAnim_2_157.pdf (二〇一九年十二月 アクセス)
 - 11 wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9A%BB%E7%9C%BC> (二〇一九年十二月 アクセス)
- 参考** 徳安浩明「吉井川上流域における鉄穴流しと濁水紛争」人文地理第四六巻第六号、一九九四年、四六巻六号p. 628-641
<https://www.jstage.jst.go.jp/article/jihg1948/46/6/46_6_628/_pdf/-char/ja>
- 徳安浩明「たたら製鉄による中国山地の開発に関する歴史地理学研究」二〇一五年一月、ヴィアートル学園洛星中学高等学校(博士号申請論文)
<<https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/HB/B055/HBB055IL001.pdf?>>

キーワード：たたら、誕生寺、美作、法然上人

(せがわ ひさし 東海学園大学名誉教授・名古屋産業大学非常勤講師)